

## —自然と文化—自然と文化の関係—

### 2. 自然と文化の関係

#### ①自然と文化の蝶番

レヴィ＝ストロースは、「すべて普遍的であるものは、人間にあっては、自然の秩序を表し、自然発生性によって特徴づけられる。そして、ある規範に縛られるものはすべて文化に属し、相対的であり、特殊であるという属性を示す。1)」と自然と文化を区別する。

この区別について、「原理的区別を確定する事はむしろやさしいが、その分析をおこなおうとするところで困難が始まる。この困難はそれ自体が二重である。2)」とする。「どこで自然が終わるのか。何処から文化がはじまるのか。この二重の問いにはいろいろな答え方をおもいえがくことができる」とも言う。そして「そうした答え方のどれも、今日までのところでは、人をひどくがっかりさせるものでしかない。」としている。

自然と文化という二つのカテゴリーは、蝶番を持って繋がねばならない程厳然たる別個の範疇でありながら、人間の生活の具体においては混然一体、主従、上下の関係を確定して分離させる事のでき難い二つの範疇と言うべきであろう。神話は、この二つのカテゴリーを分けると同時に繋ぐ蝶番として、この間の移行を手を変え品を変え語りつつ、その懸隔の縮減を図り、そしてこの作業の完遂不能を確認するがごとく、初期の 2 項対立軸を抱え込んでいる。

#### ② 自然的要求と文化的要求

人間は、人間足りえた時にはすでにして、生起する問題は人にとって全て文化の領域にあるとも言えようが、しかし現実には自らを包む自然の中に、ときどきにさまざまな差異を認めつつも、生命活動を取り巻く自然的、文化的環境の双方からの要請に対峙して、自らの命と種の継続と言う生物に普遍的な活動の最中にあるとも言えよう。

食欲と言う最も自然的（生物的）な要求であっても、先進国では摂食障害の娘達が大勢存在し、拒食、過食者も同じく、世界には宗教的禁忌の食物が指定されている。

生殖と言う生物種に普遍的な営み、種の保存と言う本能からの欲求である性欲にあっては、特に他者（異性）との関係、接触が介在せざるを得ず、ここには様々な性愛が存在する文化領域が広がっている。倒錯とされる性愛はさまざまであろうし、インセスト・タブ

---

1 クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』  
P64 番町書房 昭和 62 年 3 月 20 日

2 クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』  
P56 番町書房 昭和 62 年 3 月 20 日

一はあまねく社会に存在している。

そしてすべての言説は男性優位の文化に裏打ちされ、ジェンダー構造の内側にあるのであろうし、レヴィ＝ストロースは「性の問題をそれ自体として、他の問題から切り離し、それだけを特別に扱っている神話はひとつもない<sup>3</sup>」とも言う。

自然と文化の境を求めて、文化以前のなふるまいを動物に育てられたと言う「野生児たち」のどの水準かと考えても、人間の場合には、「隔絶した人間が退行してそこに立ち戻り得るような、種族の自然的ふるまいと言うようなものは存在しない<sup>4</sup>」のだから、人間におけるこの区別はむずかしい。

そこで「本能的諸規定作用からへだたった行為のうちに規則があるかないかを、社会的態度の最も有効な基準として提供した。規則があらわれるところいたるところで、われわれは確かに文化の段階にある事を知っている」とレヴィ＝ストロースはいう。

そして「現実の分析にかわる、規範と普遍性と言う二つの基準は、より複雑な秩序の総合の中に入り込んでいる自然的要素と文化的諸要素との分離を——少なくともある場合と有る限度内では可能にするところの理想的な分析の原理をもたらす。<sup>5</sup>」と言っている。

### ③ 社会と文化

ところで「社会学者は、文化は社会に内在し、その結果として現れるものとする。いっぽう人類学者は、社会的現象を文化に属するものとして理解している。社会を文化の中にしまったかとおもうと文化を社会の中にしまってみせる。この「言葉の手品」をどのように理解したらいいだろうか<sup>6</sup>。」とレヴィ＝ストロースはつぶやく。

社会学者デュルケムは文化を「社会を構成することになる『行動様式』の固体化である『存在様式』の総体」として定義している<sup>7</sup>というが、社会学者としては、社会の文化に対する優位性をもって社会学の存在の原理を示していると考えられる。しかしそれ故に、個人と集団、歴史的観点と機能的観点对立を乗り越えられなかったとも指摘されると言う。

また文化の社会に対する優位性を主張する人類学者達は、文化を「象徴現象の織りなす関係の総体」と定義しており、それは見事に文化を言いあててはいるけれども、象徴現象とは現実の社会的事実の中におけるのと、文化的事実の中におけるのとでは同じ位置を占

---

<sup>3</sup> レヴィ＝ストロース/エリボン 竹内信夫訳『遠近の回想』P250 みすず書房 1991/12

<sup>4</sup> クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』同上 P59 番町書房 昭和 62 年 3 月 20 日

<sup>5</sup> クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』同上 P63 番町書房 昭和 62 年 3 月 20 日

<sup>6</sup> レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P30 講談社選書 2009 年 6 月

<sup>7</sup> 同上 P30

めるものではないと<sup>8</sup>レヴィ＝ストロースは指摘する。

ところである種の蟻や蜂は、集団で生活して社会を形成しているが、そこには自然からの組み立て方はあっても、文化からの組み立てとは異なる社会の組み立てを持っている。しかし人間の社会について、レヴィ＝ストロースは「各個人の存在と物理的生活にかかわりの深い社会は、歴史的に文化に先んじている。なぜなら文化の無い社会は考えられても、社会の無い文化は考えられないからだ。<sup>9</sup>」と指摘して、社会の文化に対する優位性に論及していると思われる。

またレヴィ＝ストロースは「あらゆる事実が、死の問題に対して人間がとる相補的な応答のようなものとして、生物の中に文化と社会が発生している、と言う事を示唆している。社会は、自らの死すべき運命を知る事を阻むものとして生じ、文化はそれを知る人間の対応として生まれている<sup>10</sup>。」という。

自然としての生物個体に必ずやってくる死。文化状態に移行し集団的規律をもって「死すべき人間」の生命活動、生活をより可能ならしめる社会。集団の消滅を回避し、集団の継続と繁栄を求める社会システムと文化、その間を浸している象徴現象、その織りなす文化的事実と社会的事実の中を、生物個体として、社会的存在を生きる人々が浮かび上がる。

集団の存続のための規制の存在が、文化状態への移行をしるしづけると考えると、社会と文化は互いに循環的であり、文化は人間の社会形成、その社会集団の継続の必要条件として、社会に内在している。しかし人間の社会が具体的な実体であるのに対して、文化は象徴現象を擁しており、観念作用、象徴機能が働く分だけ、実体を越えると思われ、その意味で文化は社会より広い範囲を包含していると考え事ができよう。そこで私は、文化は社会を包含しており、より広いとして、自然との関係にあっては、自然と文化と言う 2 項対立を措定しようと思う。

—自然と文化—文化人類学的視点から見る貧困へ—

---

<sup>8</sup> レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P30 講談社選書 2009年6月

<sup>9</sup> 同上 P31

<sup>10</sup> レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P31 講談社選書 2009年6月